

稲垣先生を偲ぶ

岩 下 紀 之

本学名誉教授稲垣富夫先生は、平成十一年九月十八日、逝去された。先生は七月のある日、最後の御著書となった「万葉人」を持って大学にお見えになり、国文学科の各先生方とごやかに談話され、ますますお元気であられたので、訃報をうかがって驚きを禁じ得なかつた。ご遺族によると、ご病氣のことはご承知で、八月には山にも登っていらしたのであるが、九月にわずかの期間入院、逝去されたとのことである。平成八年に奥様をなくされ、翌九年にご退職、そのころ奥様の遺稿を「回帰」という歌集におまとめになった。ご自身の御著書も完成したこととて、なすべき仕事を終えたものとお思いになり、大学においてになったのは、最後の挨拶というお気持ちであったのかと想像するのである。

先生の履歴、業績については、ご退職の年の本学「国語国文」に明らかで、再び述べる必要はない。ここには、同じ国文科に籍をおいた後輩として、思い出を記し留めておきたい。

およそ自分で選んだ専攻分野は、自分の性格にあっているからこそ選択したものであるし、研究を続けるうちにその研究のありかたが自分の性格をも変えてゆくように思われる。和歌の研究者でも上代と中世では研究の進め方に大きな違いがある。おそらく、大和をはじめ万葉に詠まれた各地を先生は何度も踏査しておられるに違いない。その結果は、論著とは別に、大変な健脚ぶり、旺盛な活動力というようなことにもあらわれている。

私が本学に勤めはじめた昭和五十六年のことであるが、国文学科の研修旅行で伊勢の斎宮跡を訪れた。ちょうどそのころ発掘がすすみ、その現場を見学したのである。まだ博物館はできていなかったところで、斎宮跡調査事務所にいろいろな展示物がかざられていた。炎天下、発掘現場にむかうと、そこには日光を遮るものもなく、発掘作業と出土品を見るのに、かなりの疲労を覚えたことであった。その後松阪に向かい、駅から松阪城まで歩いた。開学以来まだ日の浅い時代で、研究生・卒業生も顔を見せていた。最初にあごをだしたのが、一番若い中国文学の高橋先生と、私であった。駅からお城までは、もうタクシーにしましょうと悲鳴を上げたのであったが、一行はさっそうと行進し、城内の本居宣長記念館に到着した。先生はもちろん先頭で道案内をなさった。記念館のあと、隣接する宣長旧宅を見学した。先生は、さらに城跡の高みに登られ、また梶井基次郎の文学碑を説明された。駅にもどるときも、みちみち宣長旧宅跡・墓などを説明された。駅で解散して、我々は這々の体で近鉄電車に乗って帰宅したのであるが、先生はさらに有志のものと松阪の一夜で有名な宿、新上屋跡まで立ち寄られたのである。引率にあたった近藤一先生、服部貞蔵先生はすでになくなられ、高橋良行先生は母校に籍を移された。いま稲垣先生も世を去られた。往事は渺茫として夢に似ている。

研修旅行には毎年のように参加され、いろいろな思い出があるのだが、ある年の三千院で遭遇した豪雨も忘れられない。山門への道が川となり、あたかも沢のぼりのような激しい流れとなっていた。こういう湿潤な日の御仏たちも不思議な魅力をもつものである。正座する像について、天井と天蓋について、説明をしてくださった。バスで解散するとき、先生はいつも「家に帰ったら疲れたらいいけない。お母さんに心配をかけてどうするか」とおっしゃった。いかにもお人柄が偲ばれることである。

先生と私は、同じ学年のクラス担任であったので、それにとまなう思い出も多い。新一年生は、学期の始まる前に飛騨の淑友館でのエンカウンターキャンプに参加するが、平成八年の一年生の担任としてご一緒した。ご一緒するのはこれが三度目だったと記憶する。この学年に対して、先生は授業をお持ちでなく、定年にもあつたおられたため、この機会に

特別講義をなさり、教員も聴講させていただいたのであった。「万葉集には和歌が約四千五百首あり、およそ人間の感情は、この中にほぼ言い尽くされているとみられる。」と話し始められ、まことに立派な講義をなさった。この古典についての、ご見識を披瀝されるにあたり、新入生にも、一応国文学の研究者である我々にも、あれほどの感銘を与えてくださったことは忘れがたい。

退職者を送るにあたり、文学部では、最後の教授会のあと、簡単な立食パーティーを催す慣例になっている。ある年、学部長は、その年旅行した浜名湖のことを話題とし、万葉の歌の一部を引用されたことがある。そのときそばにいた私に対し、先生はただちにその歌がどこにあるか、どういう場面で詠まれたかを説明してください。万葉の研究者は本文をだいたい暗記しているので、先生としてはどうということでもないのだが、これはやはり並大抵の修行ではない。

とだえがちの追憶をこのように進めてみると、私はご逝去をを悲しむのと同時に、研究者にして、実作者と円満な人格者の面とを兼ね備えられた先生は、幸福な一生を送られたと考えるのである。そして、この一文を閉じるにあたって、万葉からあまたの挽歌よりも、なぜか天武天皇の

よきひとのよしとよく見てよしといひし芳野よくみよきひとよくみ

を思い起こす。「よき人」を思うとき、稲垣先生が脳裏に浮かんでくるからである。